

ジャローラとカワジャ スーダン・ハルトゥーム 1995年8-10月

平川 智章

はじめに

現地の人々は、その地を訪れ留まる者を、様々な名で呼ぶ。彼らの名付けは自由で想像力に満ちている。スーダンの首都ハルトゥームのシルック・コミュニティでわたしが「ジャローラ」と「カワジャ」と呼ばれたことは、彼らが抱える問題を考えさせてくれる。

ハルトゥームでは、学生を中心としたデモが頻発し、警官の鎮圧が続いていた。40度近い熱射にもかかわらず、話を交わした人々の表情には緊張感があふれていた。ハルトゥーム大学に足繁く通っていたために周辺のセキュリティの目についたからだろうか、滞在していたサハラ・ホテルには時々セキュリティが顔を出していた。わたしは深夜にカルトゥーム郊外をうろついたり、他家に長々と居座ることに慎重になっていた。

それだから、シルックの人たちに、結婚式が近々開催されて伝統的なダンスや歌も見れるからおいでと誘われたときも、彼らに迷惑をかけるのではないかという心配が先に立った。わたしが参加することも警察に報告してあるから大丈夫だという話もあったが、わたしには疑わしかった。不安を抱きながらも結局参加することにしたのは、彼らの招待に応じたというよりも、それまでのハルトゥーム滞在にわたし自身若干の焦りを感じていたからである。それが、多数のシルック人が集まる場にわたしが出席するはじめての機会であった。ハルトゥームに入ってすでに3週間が過ぎようとしていた。

ジャローラ jalora

シルック人の大多数はホームランドのある南部の上ナイル州に住むが、出稼ぎ労働者以上に多くの者が、度重なる飢饉や内戦のために、故郷を離れて北部の白ナイル州やハルトゥーム州で生計をつないでいる。今年は豊作であったが、第2次内戦は13年目に突入していた。

彼らの大多数は敬虔なキリスト教徒であるが、伝統的な結婚式も開催される。これは教会での挙式に先立って行われるきまりになっている。新婦はハルトゥーム南西のフェティハブに住む娘、新郎は西部のハジ・ユシフに住むデヴィット・ボーイ似のデンマーク人だった。彼女は白人と結婚したフェティハブでは初めてのシルック女性だ。「デヴィット・ボーイ」がスーダン・キリスト教評議会に勤めることから、ハジ・ユシフの広場にはヨーロッパから来た親族、友人や隣人のキリスト教徒らも集まっていたが、フェティハブ中のシルックが集まったかのようなようだった。数百人のシルック人の集まりに加わり、シルックの挨拶を交わし会話にできる限り参加すること。それがわたしにシルック語を教える先生の出した課題だった。シルック語を学ぶ異邦人の出現に、人々は戸惑うよりも熱心につきあうことに徹した。式の合間の食事時には、デュラ（モロコシ）から作られるアッサリーヤという地ビールが振る舞われ、人々は輪になって会話に熱中する。新婦の親族が座る奥の座から一人の男性がわたしに近づいてきたときに、わたしの頭の中には発音のことしかなかった。

はじめて会う人には、互いの出身地や出自を問い答えるマナーがある。しかし彼の一声は予期しないものだった。「ジャローラ」。誰かと勘違いされたのかと思い、わたしは応えた。「いや、はくは名前はトモアキだ」。

同席者はニヤニヤし、先生のひとは爆笑した。呆然とするわたしに先生は寛大だった。「トモアキ。ジャローラはジャル・オラのことだ。ジャルは人だよな。ジャオラは何だ。うん。オラは姻戚関係のことだ。ジャローラは姻戚の意味なんだ。「へえ」。「じゃ、奴は何でお前をジャローラって呼んだんだと思う？」

「答えはこうだ。今日はデンマーク人とシルック人の挙式だ。デンマーク人はカワジャ（アラビア語で白人をさす）だな。お前にはびっくりかもしれないが、奴はお前をカワジャだと思ったんだ。そのカワジャがカワジャの結婚式に出て、写真をとったり、挨拶したりして回っている。だからお前は新郎の親族だと思われたのかもしれない。いや、俺には違いがわかるよ。お前はカワジャじゃなくて日本人だってな。でも奴は花嫁の親族だ。親族同士は式の初めに挨拶せにゃならん。奴さん。お前をみつけてあわてて挨拶にきたってわけだ。それで「ジャローラ」さ」。

カワジャという語を、スーダン人は一般に白人よりも外国人を指すのに用いる。しかし知り合ったシルック人たちは、わたしを「カワジャ」とは呼ばなかった。彼らにとってわたしは日本人であ

り、そして「わたし」だった。それが「知り合うこと」であると、わたしは理解していた。先生によれば、「ジャローラ」とわたしを呼んだ彼にとって、互いに問い答えるよりも、結婚式の場のマナーにしたがうことが重要であった。つまり「ジャローラ」と呼ばれることで、わたしはデンマーク人、あるいはデンマーク人と日本人の民族の違いを乗り越えた「カワジャ」という民族として扱われた。先生のこの説明は腑に落ちなかったが、シルックのマナーにしたがって受け入れてもらったのだと、わたしは好意的に解釈した。

カワジャ khawaja

しかしスーダンの状況には、わたしが呼ばれた「ジャローラ」を解釈するもうひとつの側面がある。現在スーダンは国際社会から孤立している。国連は現政権を非難する決議を採択し、スーダン政府は国連批判の声明を繰り返している。OAU（アフリカ統一機構）もスーダン政府批判をおこなっている。隣接する9カ国との関係は、市井のスーダン人にとって関心は高いが、リビアとの交易が盛んなことを除けば、友好的な隣国はいなくなってしまった。わたしがハルトゥーム滞在中にラジオで聴いた、国連や隣接諸国首班を批判する政府声明は、国内物価に危惧を抱く学生らを中心として政府批判のデモへと駆り立てたが、それは政府の姿勢をいっそう強硬にさせただけだった。ラジオとテレビをつうじて国民団結を謳い掲げた

9月19日夕方の政府声明をうけて、翌日のメイン・ストリートは政府支援を叫ぶ人々のバスを使った行進で埋まった。わたしはハルトゥームの繁華街ジャム・フリーヤ通りのブック・ショップに勤めるバリ人の友人と、店のシャッターを降ろし通りを眺めていた。暴徒の襲撃から店をまもるためだ。群衆が叫ぶシュプレヒコールは「出ていけカワジャ」だった。



花嫁宅へ向かうシルック文化協会の面々とその同輩。通例は花婿の同輩がその役を担う。

外国人に対する排斥の念は強い。国連や国際社会に非難されるたびに、政府は国連を、国際社会を、そして外国人を非難し、民衆はそれに焚付けられる。彼らが叫んだ「カワジャ」には、明らかに外国人に対する侮蔑がにじんでいた。わたしが出会ったシルック人も、国連やアメリカのやりかたに不満と憤りを感じていた。しかし彼らが「カワジャ」について話す文脈から悪意を読みとることはできなかった。彼らの圧倒的多数がキリスト教徒であり、ヨーロッパの援助団体との関係も深いからだろう。

大ハルトゥームに散らばるスーダン人のコミュニティは、地理的に排他的な意味でのコミュニティではない。彼らは誰もが、異教徒、異民族、外国人を隣人として生活している。コミュニティでは異民族間で小さないざこざがよく起こる。英語の使用にもナーバスになる。南部人のなかには英語教育を受けた者もいるが、ハルトゥーム内で英語のコミュニケーションは希だ。南部人にとってさらに厄介なのは、反政府勢力の存在である。内戦に民族紛争に疲れはて、故郷を逃れてハルトゥームにたどりついた彼らは、ここでもまた、反政府運動と政府のいざこざに巻き込まれている。シルックの伝統的結婚式の開催はスーダン・キリスト教評議会で決定された。アラブ系住民を刺激しないことに評議会は慎重であっただろう。わたしの気配りもそこにあった。

わたしが「ジャローラ」と呼ばれた理由を解くには、式がシルックの伝統的結婚式であったこと、新郎の住むコミュニティで開かれたこと、そしてそこではアラブ系のスーダン人が多数だったことを考慮する必要がある。結婚式で、新郎とその家族はジャル・ニヨム jal nyom (花婿) とジャローラとして扱われた。もしこれがデンマークのキリスト教のスタイルであれば、見物したスーダン人たちは、カワジャに嫁いだシルック人に対し



て嫌悪感をあらわにしたかもしれない。身内の結婚式に出席した見慣れないカワジャであるわたしをみつけて、シルック人の男性は、「カワジャ」や「日本人」ではなく、「ジャローラ」と呼ぶことで、わたしを結婚式の場と人間関係に引き入れた。この呼称は、カワジャを姻戚として初めて迎えることになったキリスト教徒であるシルック人の、カワジャに対する複雑な思いから生まれたものだろう。それは、異郷ハルトゥームに生きねばならないシルック人のささやかな知恵のようにわたしには思えた。

おわりに

「カワジャ出ていけ」が吹き荒れる行進を眺めているとき、ある壮年の男性がわたしに向かって「出ていけ」と詰め寄った。日本政府の無償援助停止が記憶に新しかったのかもしれない。パリ人の友人は「彼らはわれわれ南部人にむかっても『出ていけ』って言うんだよ。そのとき、やっぱり自分もカワジャなんだって思うんだ」と寂しそうに説明して慰めてくれた。政府は反政府運動が激しい南部の人々をも、「カワジャ」の名の下に攻撃する。わたしには、一人でも多くの「カワジャ」をつくることで、政府は生きながらえているように思えた。

(ひらかわ ともあき 総合研究大学院大学)